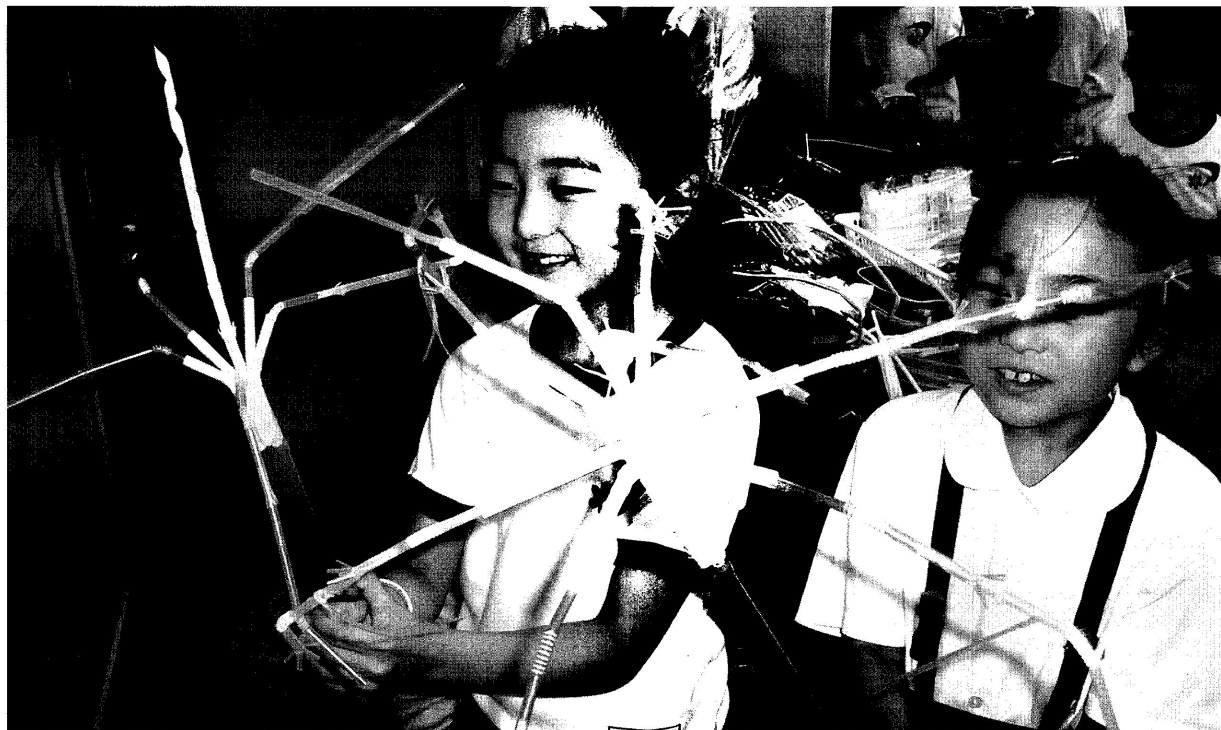


図画工作科の研究

佐藤 昌弘



🌀 キーワード

捉え直し 発想・構想 選択・決定

🌀 主張

図画工作科では自分にとっての新たな造形表現を創りあげる子どもを目指す。そのために、自分の表したいことを豊かに発想・構想する力と発想に見合った表現を生み出す造形技能の形成に着目した。

子どもは、自分の表現や表現対象を多面的に見ることで捉え直し、よりよい表現を求め発想をふくらませてくる。そして、想像力を働かせたり、仲間の表現や作例から表現の可能性を見出したりすることで、材料や表現方法の選択肢を増やし、発想に見合ったものを選択・決定していく中で構想する力を高める。さらに、既存の造形経験を想起したり、表現効果を比べたりしながら、造形化にかかわる問題を解決する中で造形技能を形成していく。

こうした表現過程を繰り返す中で、自分の造形的な見方・考え方、感じ方、技能が変わってくることを自覚し、自分にとっての新たな造形表現を創りあげる姿を明らかにした。

I 自分にとっての新たな造形表現を創りあげる図画工作科

1. 図画工作科で求める子ども

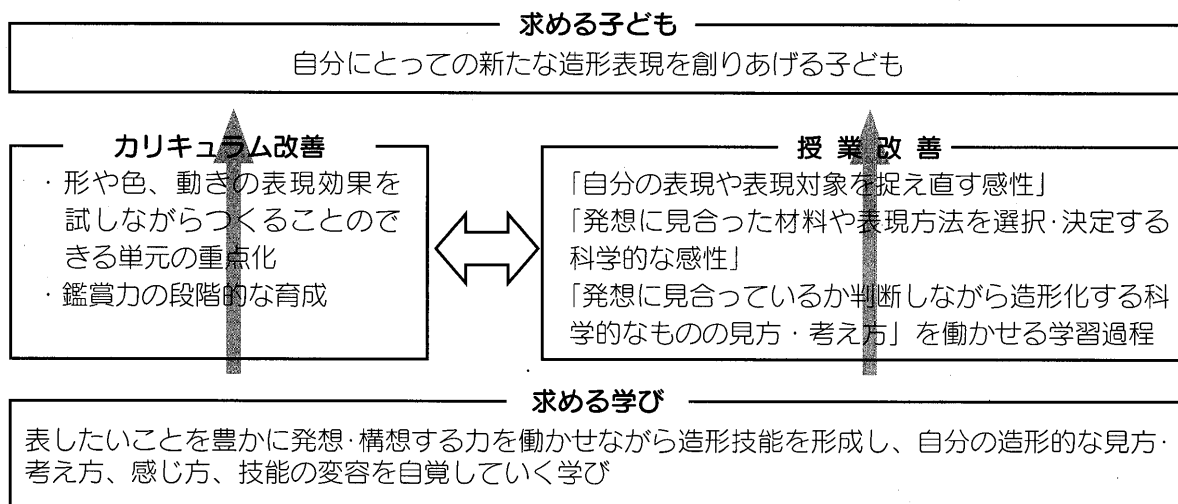
図画工作科で求める子ども像を、「自分にとっての新たな造形表現を創りあげる子ども」とし、表したいことを豊かに発想・構想する力と発想に見合った表現を生み出す造形技能の形成に着目した。

造形表現活動は、材料や題材とかかわりながら、自分が感じたり考えたりしたことを表現していく主体的で創造的な活動である。しかし、授業では発想をふくらませ、よりよい表現を生むために自分が納得いくまで構想し、造形化していく姿を生み出す働きかけが十分とは言えなかった。そのため、つくる楽しさを感じていても、図画工作科の学びを通して、造形的な見方・考え方、感じ方、技能が変容したという自覚をもたせることが弱く、自分の表現の枠から抜け出せないことが少なかった。

この課題を解決していくためには、自分の表現や表現対象を捉え直してもっとよくなりそうな可能性を見出し、ふくらんできた発想をもとに構想し造形化していく過程を繰り返して、表現を練り上げていくことが大切である。

こうした学習で、見方や考え方を転換して対象を多面的に捉えること、複数の材料や表現方法の可能性を見出していく考え方、課題解決に働く造形技能の形成といった、自分にとっての新たな造形表現を創りあげることを期待する。

具体的には、以下のようなカリキュラム改善、授業改善によりその具現に迫った。



2. 自分にとっての新たな造形表現を創りあげるカリキュラム改善の視点

(1) 形や色、動きの表現効果を試しながらつくることのできる単元の重点化

造形表現活動を進めていく過程で、材料の特性や自他の表現の色や形を捉え直し、美しい形や色、おもしろい動きになるために構想を練り、表現効果を確かめながらつくることのできる「つくりたいものをつくる」の単元を学期ごとに重点化していく。

(2) 鑑賞力を段階的に育成する

表現効果を比較したり、自分の表現や表現対象を捉え直したりすることに働く力として、鑑賞力の育成を図る。以下の内容を育成の重点とする。

低学年	「選ぶ」	・好きなもの・きれいな感じのするものを選ぶ。
中学年	「気付く」 「見つける」	・新しい表現方法に気付く。 ・自他の表現方法の共通点や違いを見つける。
高学年	「見比べる」 「意図を考える」	・同じテーマの他の表現を見比べる。 ・表現の意図を想像する。

3. 自分にとっての新たな造形表現を創りあげる授業改善の方策

(1) 図画工作科ではぐくむ「感性、科学的な感性、科学的なものの見方・考え方」

① 感性「自分の表現や表現対象を捉え直す力」

○自分の表現や表現対象について、形や色、表し方から振り返ったり、他者の表現と比較したりするなど、観点を变えて多面的に捉え直す力。

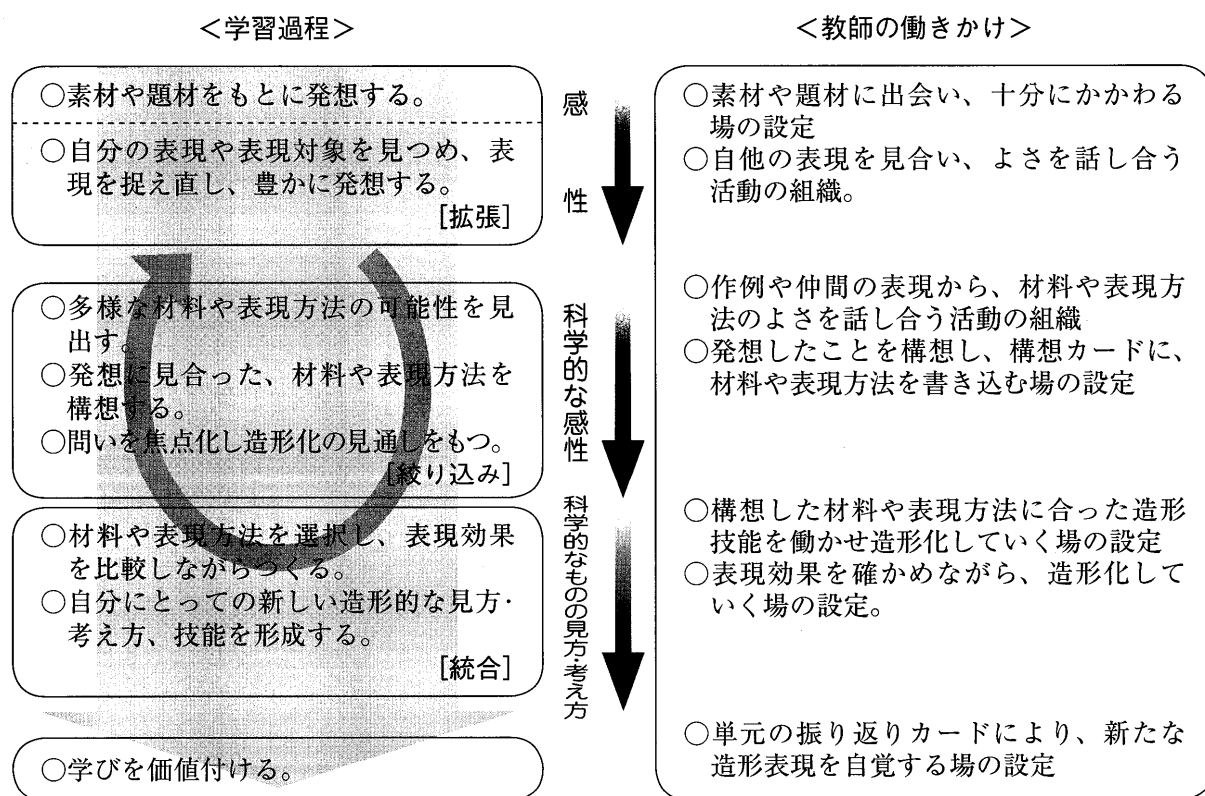
② 科学的な感性「発想に見合った材料や表現方法を選択・決定する力」

○想像力を働かせたり、仲間の表現や作例から表現の可能性を見出したりして、材料や表現方法の選択肢を増やし、発想に見合ったものを選択・決定し造形化の見通しを明らかにする力。

③ 科学的なものの見方・考え方「発想に見合っているか判断しながら造形化する力」

○既有的経験を想起したり、表現効果を比べたりしながら、造形化にかかわる問題を解決し、発想に見合った表現を生み出す力。

(2) 「感性、科学的な感性、科学的なものの見方・考え方」を働かせた学び



4. 新たな評価方法の開発

- (1) 自分の表現や表現対象をどのように捉え直し、表したいことを明らかにしてきたかをイメージマップから見取り評価する。
- (2) 発想のふくらみに合わせて、複数の材料や表現方法の中から選択したり、つくりかえながら表現を決定したりしていたか、活動中の子どもの様相や製作カードから評価していく。
- (3) 新たな造形表現を創りあげる上で働いた、捉え直しの視点や構想で働かせた思考方法が、次の題材の中にどのようにつながって働いているか、活動中の子どもの様相や製作カードから評価する。

Ⅱ 実践の概要

第2学年

「くるくるまわれ ゆめかざり」

1. 発想のふくらみに見合った材料や表現方法を選択・決定し、自分にとっての新たな造形表現を創りあげていく学び

本単元ではストローと造形紙を主材料として、回転する「かざり」をつくる活動を取り上げる。ここで子どもは二つの要素について追求することになる。一つは回転することで見えてくる形や色、動きの美しさを装飾的に追求することである。回転によって生じる形や色、動きの変化は、発想をふくらませ追求を促す。もう一つは回転するための安定性や強度などを機能的に追求することである。これは自分が構想した材料や表現方法と動きを確かめながらつくり、発想に見合った材料や表現方法を選択・決定していく学びにつながる。本単元では、自分の表したい「かざり」をつくるために、常に二つの要素の折り合いを考えながら追求していかななくてはならない。

回転することから「かざり」の造形的な可能性を見出し、ふくらんだ発想をもとによりよい表現を目指して表し方を工夫していく中で、自分の造形的な見方・考え方、感じ方、技能が変わってくることを自覚していく学びが、本単元で求める「発想のふくらみに見合った材料や表現方法を選択・決定し、自分にとっての新たな造形表現を創りあげる子ども」の学びの姿である。

2. 単元の構想

(1) 単元目標

つくりつつある自分や仲間の表現から、表したい「かざり」の感じにあった工夫に目を付け、自分の表現や表現対象を捉え直し、ストローのつなぎ方や装飾と回転することの動きを試しながらつくる中で、回転や揺れによる動きの変化にともなった美しさは、装飾や形の工夫により生み出されることに気づき、自分の表したい「かざり」をつくることができる。

(2) 追求の構想（7時間）

1次 風で回るパーツで遊ぶ（1時間）

- ① ・風で回るパーツに、ストローや造形紙の飾りをつけるときれいになりそう。
◎ストローや造形紙のつなぎ方や形を工夫して「くるくる回るかざり」をつくろう。

2次 「くるくる回る かざり」をつくる（5時間）

- ② 自分の発想に見合った材料や表現方法を構想し、形に表す。
- ③ ・いろいろつないで回り方を試しながら、「くるくる回るかざり」をつくろう。
・自分のつくりたい「かざり」になってきたよ。
- ④ 自他の「かざり」をよくみつめ、発想をふくらませ構想する。
◎もっと○○してみたくなったよ。
・「○○なかざり」を表すためには、どんな材料や表現方法がいいのかな。
・材料や表現方法をいろいろ考えると、□□のやり方だと表せそうだな。
- ⑤ 材料や表現方法の違いを比べながら、自分の発想に見合った表し方を選んでつくる。
- ⑥ ・材料や表現方法を比べたら□□のやり方が自分の表したいことに一番合っている。

3次 「くるくる回る かざり」の鑑賞会をする（1時間）

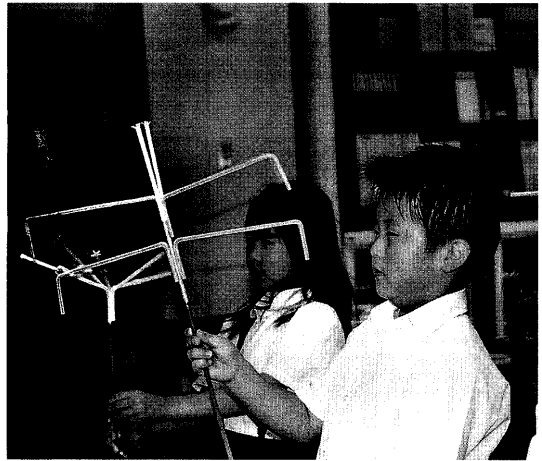
- ⑦ ・ストローを工夫してつなげたらすてきな「かざり」ができた。
・自分の「かざり」がどんどんよくなってきたので、うれしかった。

3. 授業の実際

(1) もっと自分だけのきれいな「かざり」がつくりたくなってきた。

子どもたちは教師の提示した風の方で回るパーツに興味を示し、装飾して「回るときれいなかざり」をつくりたいという願いをふくらませた。そして、ストローと造形紙を使って「くるくる回るかざり」をつくろうという追求問題を決め、学習活動をスタートした。

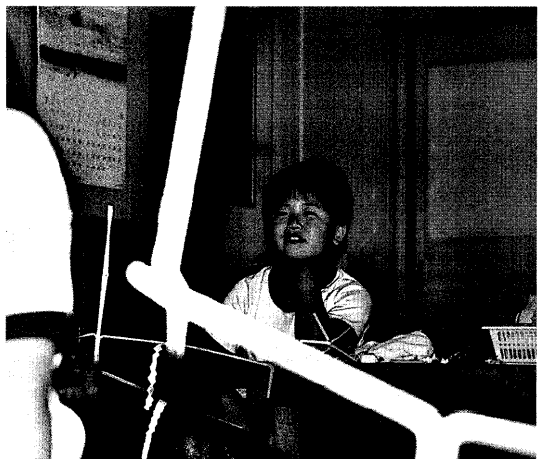
幸男さんは、ピンクと水色のストローをつなげ、回転する「かざり」をつくり始めた。「どんな『かざり』をつくろうと思うの。」と聞くと、「虹のかざり」を表したいと答えた。ストローを取り付ける角度や、つなげる長さを変えては、風に当てに行き、回る様子を見ている。真横にストローを取り付けた時、くるくと調子よく回り始めた。幸男さんは、「自分が思っていたような虹ができた。」と笑顔で発言してきた。これは自分なりの表現ができたことに満足している姿と見取った。



風に当て回り方を試す幸男さん

幸男さんは直感的な発想に優れ、ストローの色と細長い形から、虹を表したいと決めて追求を進めてきた。しかし、自分の表現や表現対象である「虹」を捉え直したり、材料や表現方法を比べて表現を練り上げたりする姿勢に弱さがある。このままでは、虹の造形的な可能性を見出すことなく、幸男さんにとっての新たな造形表現との出会いは難しいと考え、自分の表現や虹を捉え直すために二つの鑑賞活動を組織した。

まず、様々な角度から自分の「かざり」の動きや形を見るように働きかけた。幸男さんは、下から見上げるように、じっと自分の「かざり」が回る様子を見ていた。次に、虹の映像を鑑賞する活動を組織した。いろいろな形の虹の映像を見た幸男さんは、「丸や二重の形の虹があったり、周りにいろいろなものがあったりしてきれいだった。」と感想をもった。鑑賞後の、「新しくやってみたくなったことはありますか。」という問いかけに、「今のままの『かざり』ではさみしいから、もっと虹がきれいに見えるようにしたい。」と発言してきた。構想カードには「虹を大きくして上の方にも新しい部品を取り付けたい。」と記した。



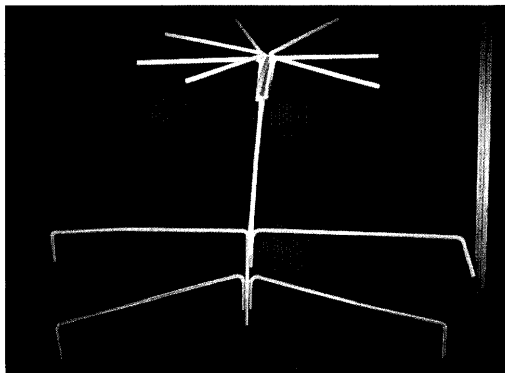
いろいろな虹の映像を見る幸男さん

この二つの鑑賞活動から周りの装飾を行うことで虹が引き立つと考えてきたのである。

二つの鑑賞活動で、幸男さんは表現対象である虹を捉え直し、自分の表現をもっとよくして、いこうと意欲を高めてきた。これは、感性「自分の表現や表現対象を捉え直す力」を働かせている姿である。

(2) 自分の表したい感じを表わすための方法を考えよう。

幸男さんは、「虹をもっときれいにするために上に花火を付けたい。」と発言してきた。そして、構想カードに「色の付いたストローを何本も束ねて花火を表し、虹の一番上の場所に取り付けたい。」と記した。黄、緑、ピンク、水色のストローを8本組み合わせて花火をつくり、「かざり」の一番上に取り付けると風に当てに行った。



上に付けてよく回らない花火

しかし、「かざり」は回らなかった。「どうして回らないと思う。」と聞くと、「何本も合わせたら重くなったから。」と答えた。「どうしたらいいかな。」という問いかけに、首を傾げる幸男さん。花火の表し方は他に考えられないだろうかと思うと、「もう一度考えてみる。」と答えた。しかし、構想カードにも手を付けず考え込んでいた。

どのように課題を解決していけばいいか見通しをもてない状態と見取り、数や量、材質を変化させて表現するとこれまでとは違う方法を生み出せることと、今まで自分が経験したことや友達との表現の中から解決するための方法を見出すことができるということを話した。

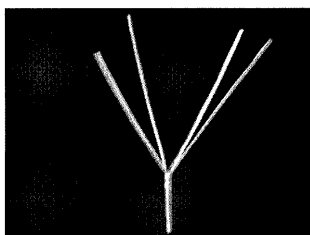
幸男さんはストローを手に持ち、しばらく眺めた後、「久志さんの形なら、花火の感じが表せそう。」とつぶやいた。久志さんのパーツのどのようなところが自分の「かざり」に生かせるのか問うと、「ふわりとした感じがいい。」と答えた。幸男さんは、以前、仲間の表現のよさを見合う活動で、ストローを細かく裂いた久志さんのひらひらしたパーツが回転によってふわりと広がった様子を思い出し、自分の発想に見合う表現として選択してきたのである。

仲間の表現から表現方法を見出し、幸男さんは造形化の見通しを明らかにしてきた。これは、科学的な感性「発想に見合った材料や表現方法を選択・決定する力」を働かせている姿である。

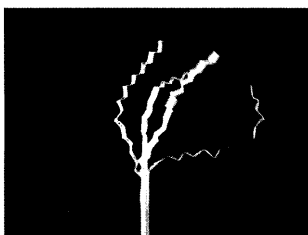
(3) 表現効果を比べて、自分の表したい形をつくろう

幸男さんは「材料ヒントコーナー」にあった久志さんと同じ形のひらひらしたパーツを虹の上部につけて、風に当てに行った。パーツは羽を広げてくるくと回った。幸男さんはその様子を満足そうな表情を浮かべて見ていた。他にも試してみたい表現はないかと聞くと、「もっと他の形の動きも比べてみたい。」と答えた。そして、再び「材料ヒントコーナー」に行き、置いてあった「くるくる丸い切り込みのパーツ」や「ギザギザに折れたパーツ」を手に取った。

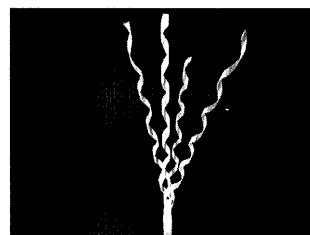
材料ヒントコーナーにある、ストローのいろいろな加工の仕方の作例



ふわりと広がるパーツ



動きのあるギザギザパーツ

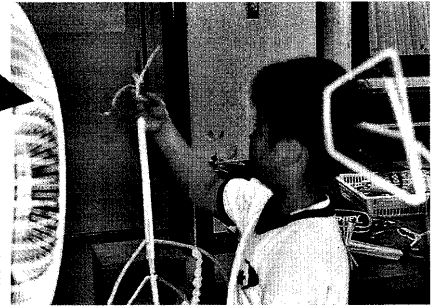


くるくる回る感じのパーツ

異なる形のパーツを自分の「かざり」に取り付け、回る動きを見ていた幸男さんは、「このギザギザしたパーツが、一番回ったときに動いてきれい。」と感想をもった。

幸男さんはストローを細かく裂いてひらひらした形をつくり、ギザギザの形をつくるために、端から同じ幅で交互に折り進めた。折ってすぐに手を離すとストローはすぐに元に戻ってしまうため、折った後に強い力でしばらく押さえていた。聞くと、折り目を確実に付けるためにとった方法であるという。できあがると花火のパーツを「かざり」に取り付け、「花火には、このギザギザが一番よく合うな。」と言って、回る様子を嬉しそうに見ていた。

花火には、このギザギザが一番よく合うな。



幸男さんは回転することによって変化する花火の動きや形の広がり比べながら、自分の発想のふくらみに見合った表現を生み出した。これは、科学的なものの見方・考え方「発想に見合っているか判断しながら造形化する力」を働かせている姿である。

(4) 自分のよさを自覚し、さらに表現を練り上げる。

虹のすぐ上にも花火があるととってもいいな。



虹に新しい色を付け加えるともっとよくなりそうだ。



虹の一番上の花火ができると、幸男さんは、「花火をもっと増やす。」と発言してきた。虹のすぐ上に久志さんと同じ形のパーツを取り付けた。回してみるとふわりと広がった。幸男さんはすぐに同じパーツを3本追加して取り付けた。他の形は比べないのかと問うと、「一番上の花火は動く感じがよくて、下の花火は広がる感じが出ているところがいいからこの形を使う。」と答えた。取り付けた後、風に当てながらストローの曲がる方向を調整する姿が見られた。

下の方の花火をつくる時に、複数の形を比較することがなかったのは、すでに先端の花火を考えた時に形による動き方の違いを比較していて、動きのイメージが幸男さんの中にあったからである。

虹の上の花火ができあがると、さらに幸男さんは、「虹の部分をもう少しきれいにしたい。」と発言してきた。花火の部分がきれいになり、虹の形と色を工夫してもっと虹をきれいにしたくなったと

いうのだ。水色とピンクの二色の虹というこれまでのこだわりを大事にしつつ、黄緑のストローをつなげて虹の形と色をつくり変え、自分だけの新たな虹を生み出していった。

幸男さんは単元の振り返りの中で、「虹に花火をつけたくなり、飾りをつけて回してみたらすごくきれいでした。その調子でつくっていたらゴージャスな『かざり』ができてうれしかったです。」と記している。これは自分にとっての新たな造形表現が創りあげられたことによる、自信や喜びの表われた姿である。

Ⅲ 成果と課題

- 自分の表現や表現対象の捉え直しには、これまでとは違った角度から表現を見させたり、友達と自分の見方のずれを明らかにさせたりすることが有効である。
- 材料や表現方法を構想していく場合、材質の違うものを選択したり、数や形を変えたりして自分の表したい表現になりそうか考え、さらに、仲間の表現や作例の中から自分の表現に見合ったものを見出すという思考方法を使うことが有効である。



- 自分の追求の状態に応じて、繰り返し何度も表現効果を試すことができる学習過程や場の設定は、科学的な見方・考え方を育むことに有効に働く。
- 材料や表現方法を構想する場合、仲間の表現や作例を関連させ、自分の発想に合ったものを見出そうとする姿が見られたが、自分の既習の経験や学んだことをどのように生かしたり組み直したりしているか十分見取ることができなかった。個々の造形の履歴を集積した中から、新しく身に付けたことは何か、以前よりも強まってきたことは何かをより明確にする必要がある。

<主な参考文献>

- 板良敷 敏編・著 2002「図画工作科の授業」小学館
- 板良敷 敏編・著 2002「図画工作科基礎・基本と学習指導の実際」東洋館出版社
- 江川 玫成著 1996「創造的思考力を伸ばす」大日本図書